

# 芦生からの便り 最終回



ちょっと早い秋をお届け その1



こんにちは！芦生研究林です。  
いよいよ、芦生便りも最終回になりました。  
拙い文をここまで読んで下さった皆さんに心からお礼申し上げます。  
ありがとうございました。

芦生便りは、「想定外の仕事」に始まり、「想定外の仕事」に終わりました。  
決して、そうするつもりなどなかったのですが、結果として、そのようになってしまったのです。

私も、芦生の林長を務めてから五年目に入りました。  
授業の関係で、本部と行ったり来たりで、なかなか芦生に腰を落ち着けられていませんが、やっと最近、芦生に受け入れて貰いつつあるかなあ、という感じを持っています。  
それ位、芦生で仕事をするのには、時間がかかるという事なのです。  
林長といえども、その洗礼は逃れられません。

しかし、言い換えれば、やはり“生”の付き合いが大事だろうということでしょう。地元の人も、職員も、学生も、公開講座に来てくださる一般の方も、人間同士です。同じ作業をし、同じ酒を飲み、同じところで語り合う、といった基本的な事柄が出来なくては、人の信頼も得られない、ということなのでしょうね。  
その大切な事を改めて、芦生で教えて貰いました。

ここ芦生研究林は、土地をお借りしている関係上、地元の方とのおつきあいが、非常に大切なところですよ。  
また、芦生に来られる一般の方との対応も必要になってきます。  
またまた、猿・シカ・熊といった自然界の方とも？！  
…ということは、芦生研究林は例外だらけ？



その2

そういった意味では、芦生は大学の施設でありながらも、特殊な役割を持っているところ、と言ってもいいと思います。  
それだけに、そこで仕事をする職員の仕事の難易度は高まります。  
何しろ、相手が幾層にもなっているのですから。

最近、買った本があります。  
「仕事道楽」という鈴木俊夫さんが、書かれた本です。  
サブタイトルが、「スタジオジブリの現場」となっています。  
鈴木さんは、「トトロ」等を生んだスタジオジブリのプロデューサーです。  
まだ、「序にかえて」だけしか読んでないのですが、本の帯に“いつも現在進行形。面白いのは 目の前のこと”とあって、それにつられて買ってきました。  
その帯の言葉も素敵でしょう？



その3 (ウリハダカエデ)

その唯一、読んだ「序にかえて」に、こんな箇所がありました。  
「作家の吉行淳之介さんがこんなことを言っていたと思います。「忘れてしまう記憶などは大したことないんだ。」つまり、自分の体の中にしみこむ記憶と、忘れ去られる記憶と、両方ある。メモとか日記とかに頼らなければ忘れてしまうことは、忘れてしまっている。いまの吉行さんの言葉もうる覚えですけど、いつのまにか自分のなかに入っているということが大事なんじゃないか。…」

仕事道楽 鈴木俊夫著 岩波新書

今、芦生研究林にいる職員（私も含めてですが）には、この鈴木さんの言う「体にしみこむ記憶」を出来るだけ沢山、芦生で作って貰いたいと思います。  
それが、この例外だらけの芦生なればこそ、学べるものだからです。  
そして、それは仕事上だけでなく、それぞれの職員の人生に想定外の事が起こった時に、必ず役に立つ事と思うからです。

みなさんも、ご自分の今いる場所で、「体にしみこむ記憶」を沢山お作りになってください。きっと、それが役に立つ事があると信じます。  
では、この言葉を最後にお別れいたしましょう。

一年間、ありがとうございました… 拝

(文：芝 正己)



## 著者プロフィール

芝 正己 (しば まさみ)

京都大学フィールド科学教育研究センター(森林環境情報学研究分野 准教授)所属。

京都大学および宮崎大学・三重大学を経て1997年10月より現在に至る。

専門は、森林利用学、森林管理・情報学。

これまでの主な研究テーマは、

- ① 森林の経営基盤整備計画・評価法に関する研究、
- ② 持続可能な森林管理と森林認証制度に関する研究、
- ③ 森林の資源利用と保全計画に関する研究。